

2 中高連携授業変革の歩み

(2) 岐阜県立飛騨神岡高等学校における実践

< 授業実践 >

授業実践に向けての構え

昨年度の連携により、中学校での英語学習の様子について深く理解することができた。その中で、オーラルワークを中心としたペア・グループ活動が多いことや、1授業時間内における生徒の活動時間がきちんと確保されていることなどは、本校での英語学習においても生かしていきたいと考えた。本校の英語科では「習熟度別授業における基礎力の定着」、「少数数クラスによる英語使用量の増加」、「進路に応じた授業内容の工夫」の3点を教科の指導方針として教科担当者全員で意欲的に取り組んでいるが、中学校と比べると座学の形態が多く、オーラルワークの時間がまだ不十分であるなど、まだ改善の必要があると感じていた。そこで、オーラルワークの効果をさらに高めるため、OCA や OCB でのコミュニケーションを中心とした授業のみならず、それ以外の科目の学習活動を見直していくこととした。また、昨年度までも行ってきた習熟度別分割授業について、さらに各生徒の到達度に応ずるようにしていきたいと考えた。

こうしたことから、今年度は授業における活動目標をより明確にすること、活動形態の工夫、評価の在り方を課題として、実践に取り組んだ。

第1回授業交流研究会

【日時】 平成14年6月18日(火)

【公開授業】

- ・1年次生A B組 英語 (習熟度別分割授業)
- ・グループ3 Lesson 2 All about Popcorn (1)
- ・グループ4 Lesson 2 All about Popcorn (1)
- ・グループ5 一般動詞の用法

使用テキスト TOMORROW ENGLISH COURSE (啓林館)

【生徒の実態】

1年次生の英語では習熟度別に5分割して授業を行っている。英語を苦手とする生徒もいるが、英語に興味のある生徒達が良い授業の雰囲気を作っている。基礎・基本を重視し、学習事項の確実な定着を目指した授業を行っている。

【指導上の留意点】

- ・中学校時の既習事項の復習を中心とし、基本事項の定着を図る。
- ・単語テストを重視し、書く時間を十分にとり語彙力をつける。
- ・「わかる」楽しさを大切にする。

【研究会より】

- ・課題設定が生徒の実態に合っていた。
- ・「わかる」ことを大切にしてい一人一人の生徒が自信をもって授業に取り組んでいた。
- ・書く時間が十分確保されていた点がよかった。
- ・習熟度別クラスでの教材の取り扱いや指導計画を中学校でも参考にしたい。
- ・どのようなテストを行い、評価(見届け)をしているかについて交流し合いたい。

- ・高校ではどこまでの到達度を目標としているのかをさらに明確にできるとよい。

第2回授業交流研究会

【日時】 平成14年11月8日(金)

【公開授業】

- ・1年次生C組 英語 習熟度別授業 グループ2 Lesson 5 Cats' Toilet Manners

【生徒の実態】

- ・おとなしいがまじめに授業に参加する生徒が多い。中学校の学習事項の定着に個人差があるが学習活動に意欲的に取り組むことができる。

【指導上の留意点】

- ・基礎・基本の定着を図る。
- ・英語を使った活動を多く取り入れる。
- ・Oral Introduction や Oral Interpretation による授業内の英語使用量の増加を図る。
- ・Loudspeaker Activity 等で4領域全てにわたる活動に取り組ませる。

Loudspeaker Activity

- (i) 一人の生徒がヘッドフォンを付け、テープから流される英文を shadow reading する。
- (ii) 他の生徒はそれを聞きながら dictation する。
- (iii) 数人が shadow reading したのち、グループを作りそれぞれが dictation した内容を確認する。教科書、辞書、ノートの使用可。
- (iv) 全員でテープを聴き、dictation した内容を確認し、グループで re-writing する。グループの代表1名が板書する。
- (v) 各グループの板書を見ながら要点を確認する。

【授業研究会】

- ・間違えても怖くないという雰囲気があり、生徒たちが自主的に活動に取り組んでいた。
- ・ペアワーク、グループワークは中学校で十分に行ってきたので高校の授業でも継続していくことで生徒たちの学習への抵抗感が少なくなっている。
- ・年間計画、単元構想を持つことで各単元での指導ポイントがはっきりしてくる。

<グローバル・スタンダードによる英語力診断>

受検した生徒は Listening パートについて特に難しさを感じたようであった。授業で英語を聞く機会をさらに増すとともに、スピードについてもトレーニングしていく必要を感じた。単語テストのように授業内でリスニングテストを行うことも効果的であろう。

<イメージン・プログラム>

外部講師による講演会

- ・講師 Scott. R. Schnell 氏
(Iowa 大学教授 文化人類学専攻)
- ・日時：平成14年7月29日(月)
9:30~11:00



- ・講演内容

Group Identity, self-fulfilling prophecy について。他者、又は他グループに接したとき、一般的には相違点をまず見つけ、そこで線を引いて自他を区別しがちであるが、共有する部分があり、それを認めることが大切である。差別は先入観が生む。自分の価値観、自己判断が大切である。

- ・聴講者：25名

- ・生徒の感想

「なんとなくわかった。」「話されている言葉は分かるが、内容が難しかった。」

「今はぴんと来ない話だったが、ためになる話だったと思う。」

- ・反省

講師の先生は易しい英語を使ってゆっくりと話をして下さったが、内容が抽象的だったために、話している言葉がわかっても言っていることがわからない、という状態になり、反応が少なくなってしまった。しかし、内容についてはそれぞれの生徒が「いつかこの内容を実感する時が来るだろう」と感じていたようだ。また、日本人でない方の講演を聴くことが初めてである生徒がほとんどで、講演を聞くことに対して緊張が見られた。事前にある程度の質問事項を考えさせられるような準備ができれば良かった。

消耗品の購入

視聴覚教材、資格試験の問題集、英文図書は各授業で活用された。とくに教科書のない科目でリスニング教材として年間を通して活用された。今年度はそれらに加え、英語のボードゲーム (Scrabble, Guess who 等) やカードゲームも購入した。実際に英語圏の人々が遊んでいるゲームなので、「学習をしている」という肩の力を抜いて英語を使うことができた。

<成果と課題>

- ・昨年度の交流で見学させていただいた中学校の生徒が今年度本校に入学してきた。前述の通り、昨年度の実践で中学校と高校での指導形態の違いを目の当たりにし、高校での指導方法を見直す必要を感じた。
- ・中学校での Communicative approach やオーラルワークの積み重ねを高校で生かせるよう、Loudspeaker activity を取り入れるなどして授業を工夫した。この今年度の実践を中学校の先生方から高く評価していただいた。
- ・中学校で時間の確保が難しいと思われる、書く活動、語彙力構築に力を入れるため、従来から行っている単語テストの重要性を実感した。生徒自身も年間を通した単語テストに対して「語彙力がついて良い」と意欲的に取り組んでいる。
- ・2年間の実践を通して、指導内容はこれまでどおりで良いが、指導方法は変化にとんだ、マンネリにならない工夫が必要であると感じた。そのためには教員が情報を集め、積極的に新しい方法を取り入れていく姿勢が必要である。
- ・評価の在り方については、観点別評価の方法など中学校に学ぶところが多くある。2年間のプロジェクトはこれで終了するが、交流は今後も続けていきたいと思う。